

金蘭集

上

911.3

キ

上















金虎

院  
法  
井  
田  
井

乃春

太百韻

族人家名

五松同

右五十韻

六松のむ  
七詩あきんど

八  
夢より夢  
九  
風破口

一 時  
二 時

磨速  
冬系

一 梁のきこ  
一 是のきこ

[illegible]

六 炭賣乃

初雪乃ち  
京まで

三海客  
三三  
イのホ

粟得子

六  
丁  
子  
子  
初  
あ  
さ  
え

示  
う  
あ  
う  
う  
元  
何  
と  
か  
う  
う

三〇 蘇 名松 の 三一 柿 有子



右平仙

其角

枳殼角輔



跡鞠乃堂ふおのひ井却  
 侍育の陸の墮くる草井中  
 ぬらふの蟻乃ぬらふきの露乃  
 雨ふ人そいやーぬらふ鄙墨  
 門を魚をを破隙乃寺  
 理ををを物ふ衣末六七騎  
 あつて牧乃沛巨撰を  
 賜ふ多夕目と月よ改め  
 紀乃館屋秋室ふなり  
 相妻乃本れるとをの心を  
 つまねきとて上座ふ飯高  
 人あふふ年ふおとふなり楊  
 滝とをを橋ふ金山の洞  
 けふの武仙とをあり雪かを  
 系ふ吸する硯井のふ  
 玉川やおのくおの所を  
 江ぬくふを家ふより  
 帯の衣は皆枯る後をれ  
 井くともをを産ふふ海

枳 意 化 預 白 室 角 錫 下 白 枳 水 法 角 解 為 化 里 多



法の土亦利繁と埋と金む  
とつゝの江と三川の畔  
さく月より車かそゆるむ陰  
はーと小雨ともゆるかろ  
あゝ雪 残る雪山の跡  
静うふ雪く 嘘とるか  
底さうぬさうつるおおけ  
そあある眉を隠と衣く  
聖子咲く情は足る宿る  
葉か乃風は 夫はか入  
あれそ下はさる瓶は  
あれ月夜のもてかき  
ふ乃戸極難と此は位徳く  
我三代乃刀折能治  
永祿金之 松の舟  
此の田植も徳とらん  
疾速くは徳と本と  
如く是れ湯乃浦意なり  
筑紫より人の道とより連て

下 角 里 隆 化 下 白 鰯 角 舟 板 意 里 白 隆 化 板 里 板

孫勒乃堂ふおのひ井  
侍育の隆は陸なる草中  
あふの蟻乃あうきの  
雨人そいや 是る鄙  
門を魚を破隙乃寺  
理るそは物と武末六七騎  
あゝ雪 牧乃市に携  
賜とあ夕目と月と改め  
紀乃能屋秋意ななり  
補書乃本れともの  
つとれき 上は  
人あふ 年とおとふ  
滝とる 金山の洞  
けふの武仙とあある  
あゝ雪 破井の  
玉川やおのく 所の  
にぬく 家より  
帯の衣は皆 袴と  
外とる 蓑とる

あ 里 化 為 舟 角 法 水 板 白 下 鰯 角 重 白 鰯 化 意 板



甲一何常と死は常と成る

春

おありうきやハ増のう  
こゝろあむるの橋を山  
ありハまう草の根を金  
傾城と云ふぬきのあまに  
後にもあまのうけの川  
井はき毎れまぢかき  
梅まゝ若く白ひなり  
むすふ乃灯ふま消えぬ  
抱える歌のゆもあけ  
伊勢と云ふ月も白ひけ  
様よりあま橋をるあま  
伝長乃伝ふる世やまゆ  
唐土と云ふおけの玉の  
あま牡丹千里代をとく  
きまじひ若くある湯とく  
岩根やきき地をとく  
ワヤと井ふあけ  
あまのうきやつる  
復法と云ふは青ハ

法 化 下 鉾 白 新 山 化 卜 下 額 春 山 角 秋 化 昨 里



南むく葛屋の如くお宿て  
釈と嘉をう川多のつこく  
解ゆるすの度集と打金  
暫く買もの秋のころそ  
麻乃るをいそめさつめ  
みくき男乃。新まき月  
旨乃雨使七里とゆる  
伊勢何日のそれ川つ  
の車平つくきあ  
毒ハけうとの院く。張多  
二月の蓮葉くすめ月や  
呼待半乃おきさ目の乳  
胃あぬ就乃縮を穢事  
おもいあつて若けれ  
菱の葉とさうとさう。結  
小魚のけり山陰あも  
因をやうと休むるの月  
新さ。あも長う流さあ  
甲。何番と元は若と付く

不ト 橘 松 為 弦 ト 下 水 角 千 春 取 里 意 凡 結 下 取 ト 春

をあり。そ。毒ハ増の  
こ。あ。む。の。橋。吉。野。山  
あ。ハ。ま。う。草。の。若。と。金  
傾。城。と。さ。さ。ぬ。き。の。あ。さ。し  
待。も。も。あ。ま。け。う。川。く  
井。保。と。毎。れ。よ。増。か。さ。く  
梅。さ。さ。若。さ。さ。白。ひ。なり。さ  
む。南。さ。乃。灯。ふ。さ。消。え。ぬ  
抱。と。う。新。の。仲。も。さ。川。く  
伊。勢。と。さ。の。月。は。新。日。け。西。強。き  
様。と。う。さ。う。橋。結。る。あ。さ  
伝。長。乃。流。さ。る。世。や。は。ゆ。り  
唐。士。と。も。さ。お。か。し。ふ。の。呪  
あ。ま。杜。母。千。里。れ。若。と。さ。く  
そ。さ。さ。し。若。さ。あ。る。湯。と。さ  
岩。根。さ。さ。さ。さ。地。勢。と。若。さ  
け。ん。や。と。井。乃。あ。け。保。た  
さ。め。さ。う。さ。う。さ。う。さ。う。さ  
舞。法。と。け。さ。れ。青。ハ。倍。さ

法 化 下 鉤 下 白 新 山 化 卜 下 鉤 春 山 角 取 化 取 里



十月十二日 旅別去

芭蕉

旅人今あまたを別れん初時め

亦さんあを宿くあし

鷗鶴乃をほとあめが

飛をわたり山陰北霧

うけあし芝生のあけし

新し舞臺月よあしや

中乃秋画工二つ是

新てくくあし海舟

祇壇や吹牙いくも波の

鈴と衣く水君うあ

酒のまは早乙女連の

卯月乃雪と掃つて

繰つ袖つはる早瀬川

蘿一面くのころ

さあぬ里は

月やや啼くし

昔のあはく

あしと男事と

旅の偶

由之

其角

枳風

文納

仙化

真兒

觀水

全峰

虎雪

執事

魚

之

角

凡

鋪

化

時



足川の岸山は泊まじり  
 千の山とてなるる歌者の名  
 おいふ川流なる川流の  
 花をささるる花は白  
 満庭乃七葉の花は白  
 連流くり死する久し

角 山 白

十月十一日 辰別去 芭蕉

移今とあるを初め  
 亦さ人花を宿くあ  
 鷗鶴乃公はとあめ  
 新し森月よまは  
 中乃秋画二つは  
 新てくくおる海舟  
 祇壇や吹舟よい  
 鈴と衣く水君の  
 酒のま早乙女  
 卯月乃雪と梅  
 羅一面くの  
 月やや啼く  
 昔の流く白く  
 おもと男事と

由之 其角 枳風 文祐 仙化 眞兒 観水 全峰 鬼雪 純年 之 角 凡 縮 化 時







芭蕉

幸しき名や松吟萩為

家と兄あて 秋の月

踊るま備 秋の散る

よーれあーと 豆の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

あーあやあー 萩の芽

コセニ

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩

萩



上卷目錄

梅須  
年砂  
士芳  
良品  
風麦  
色夏  
本白  
肥刀  
風  
芳  
尔  
刀  
風  
麦



ところよ楽に衣帯は脱ぎ捨て  
 おしづけたる傍りの汁  
 此花の庵をわひるゝをち見  
 肩より指ぬる佐の早蕨  
 砂を雪留まゝとてし里師  
 放つ衣は松風通ふる  
 華れゝあけりて可もさ  
 甘きる竹の戸の門  
 後朝のまのふれ餅を嚼み  
 背中のきく影しづる  
 時分る猿の巾着便りき  
 多をいへる猿はの奥  
 弁柄ぬききく島帽子履き  
 洞とらゝや海へは  
 七夕の夢をわける深腹袋  
 赤膏く世とあゝるる月  
 柿の本代校ゝあらふふと  
 船てすきぬゝ名や紅葉  
 修り名の指し入るる春

芳 草 白 狐 風 麦 不 芳 不 白 日 狐 不 芳 草 芳 草 不 芳 草

小舟の星は包む村を  
 雪の肌餅をくちやん  
 松と一本山入神く  
 乞食して花ふまかゝる疏き  
 新をくけりていさゝか  
 赤きりけりて餅のちき  
 思ひ方け山吹と 摘  
 ぱりる大を纏むゝ宿屋  
 おぬのふて琵琶の名  
 川るゝ菖蒲の階をさ  
 目の塵吹て昔より夕  
 月のおふゝゝと  
 雪うらゝゝと

不 芳 草 不 芳 草 不 芳 草 不 芳 草 不 芳 草 不 芳 草 不 芳 草















[illegible]

子如成

一晶 片 半 片 葉 筆 晶 茲 考 柔 角 昆 茲 雪 昆 南 柔 雪























下化女角子卜化女子子子女下角子

萬梧

芭蕉 荷兮 越人 蕉金 舟泉 此水 蕉 人兮 泉 泉 水 枕 人 水 泉



青くやうくぬるのき田まで  
 碎てきくふかき橋乃く  
 夕ふハ唄とてぬき地  
 り水きふさすれ思と  
 追ふ木橋の馬乃さうれ  
 ずうさき一節れろ一  
 ゆけきハ繪とてさうて  
 女師走れ月とちきふ  
 雪の日乃きわさく  
 采女唄のきくは  
 砂束の川乃きさく  
 狐一牛とハ拾ひ拾ゆ

水 求 益 水 分 人 損 益 水 分 益 益

貞享四年

星昇の男と云ふとや唱ふ者

船調子に響く乃埋火

葉山乃奇之終に梅を枉けり

指子猫乃孝子意也

嘗乃度世を祐月名のは

罌のあやうな登辺まき風

一里代電母の形、川上

初さめく門をくみぬ

市ノ者ノ意一也

平西院之室

叔曰乃孝子なり我

月と酒とを  
懐國の酒

言細は甲とくもく秋のそ

源王初名字派乃橋也

蒼翠西門外

鳥の多くは、

あまのうみ

一、



承信此言 然辰道是矣 辰道是信此言 爰此

七五

81

水五國平水並土金水必土水











分五水田五分五分五分五分五分五分五分五分五分五分

杜園

重九野水芭蕉正午  
五 不 蕉 有 必 有 兮 不 兮 五



故 今 又 有 兮 必 有 兼 必 不 兼 兮 土 有 兮 何 有 兼

野水

五言古詩















光人延至菴里最光延至菴里最光人延至菴里最光人延至菴里最

竹葉刺長紅果

栗輝子系人々如以爲

[illegible]

如字并意深及人并字如魚 鼠深 烟及 蛾人 一井 為字 長如







笠おてあうーまふ腰男  
 又まづ塔のぼる夕ぐれ  
 鶯の鳴れ瓦をぬぐぬがきで  
 風ふー又たわくふのち死  
 手うて朴の座敷を引抜ぬ  
 目今登るこ物又きぬぬ  
 折るくすぬのきとちうく  
 たりれてきぬは雲より  
 沼の静けー新遊うせく  
 おげん降ー束の時をきぬ  
 韃靼の束乃寺れ月清く  
 襦子の粟れ何とまひくそ  
 浮啼てまゝ炭材の秋乃を  
 まをうぬかまゝの尾れ琴  
 ぬれぬぬ乃早ぬぬとつ  
 まさのけろけろとむのく  
 けくーの衾さるぬ西行

楯 蕉 栗 藤 山 五 塔 垂 山 栗 五 口 藤 山 栗 塔 楯

天

赤川の夜

頼人

居るも赤川なまぬかひは  
 酒をいなりぬけらる月芭蕉  
 ぬるる後う窮乏ぬぬつと  
 理をぬぬぬぬ秋の夕暮  
 瓢箪の太さ立ぬはうぬ  
 風ふやぬぬぬ市人  
 何事ともあは是名利ぬ  
 醫乃ぬぬぬぬぬぬぬ  
 何うぬ師のぬぬぬぬ  
 龍乃ぬ世話ぬぬぬぬ  
 世にぬぬぬぬぬぬぬ  
 足跡ぬぬぬ雨乃ぬぬ  
 まぬぬやぬぬぬぬぬ  
 うぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 月と雲比良入高根をぬぬ  
 雲雀さくつるぬぬぬ

人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉



破き戸乃打らけり其の来  
 尺世をさしり我妻は挽り  
 ぬきくつ後紗よつむす既  
 そのありし居る神子のあひ  
 今もくみくし望の白ひる  
 袖はるるきけけ隅  
 車やまも嵐のあやみ中  
 垣根のさしけあはこまて  
 あやみにけり味く夕ありあ  
 何のきいたるもさつむえ  
 い月のうその夜を清きよ  
 破きをきく蹴りいけり  
 秋の田を刈きぬき事の長に  
 さつくさつくさつく  
 いめき尾底の本葉を  
 託きさる子け腰くひき  
 花の比後ききさつく  
 田か一蹴くさつく腰さつく

人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人

三七 初秋ハ何や田中みく月

色道

初秋ハ何や田中みく月  
 主辰  
 わり庭芽ほのくくきとびて  
 如風  
 やさしき救れ竹まきさう  
 安宜  
 陰のかさきかきさつ子  
 自笑  
 ささうさつりけ船まきり  
 風  
 ささのさつりけ雨の所  
 足  
 田つさむけ 徳うけとび  
 足  
 水氣をいささつさおやきん  
 風  
 ねもいささるき乃きん  
 笑  
 琴琶弾てささいはてりすき  
 存  
 泊条のひきくも恥るき  
 直  
 新きさ瓦の鬼乃けき  
 辰  
 施縁鬼さつ入おの橋  
 存  
 浅川あさ角かき  
 風  
 杉さうけさ月を砂り  
 直  
 虹のききさみさつり  
 足  
 水かりさる寺れきん  
 牛

三三







片方の来る様くもつて  
 釣了なされハ水のとれたふく  
 中より新よと付久し  
 布板二本おハさう  
 隙れ一様とあつて  
 合奏事とわいては  
 膝のふたむさねおきや  
 ちん製利は鴨川此水  
 塚のふた昔の衣と才又付に  
 ちそきかいまのまう  
 月志の一大端と消て  
 とのうてととと  
 け橋と好うて  
 山いさか  
 ちんけつて  
 ちんけつて  
 ちんけつて

水 桐 衣 泉 匠 兮 人 相 水 泉 聖 匠 兮 人 衣

何れはなは何や廊  
 編笠一きて  
 田螺のふた  
 公あは  
 月星の雪の夜  
 酒飲む  
 双六  
 琴凡  
 簾  
 町  
 虚  
 藝  
 面  
 柳  
 川  
 金  
 器  
 相

水 桐 衣 泉 匠 兮 人 相 水 泉 聖 匠 兮 人 衣











イニ  
筆

柳

紀

2

良

栳

驛

一

強

樹

道

5

十

性

四

七

躬

5

子

知



21

一



1

2

1

殖

4

躬

5

子

知



21

一



1

2

1



山崎村尾小 嘉年やむうん  
 芹塚とうり 佐水つめい集  
 新川雪車一まぢの迄きて  
 おのく 武士れ冬籠る宿  
 年とぬまのゆい高の世あは  
 まうらひき とうきふさうし  
 白粉は細き松をさー今  
 何屋の事のもうぬ七夕  
 佐留る宿の柱乃月を見ん  
 衣さあうむ六条う焚  
 切櫓校うさくは 横糸ー  
 太心はくみの夢よりさ  
 さいーと湯あきさう成る  
 敷生石乃下とー石水  
 色をさうはたけをさく  
 酒乃月ういの破る女  
 六斗後さく人の正月る  
 勢のなるあは小細きぬる

良 形 良 形 良 形 良 形 良 形 良 形 良 形 良 形 良 形

元禄二年卯月廿四日  
 象升 跡三 年 寅 人  
 とも紙

三  
 隠れおやめぬおと新の粟  
 ずけは雲乃とより 雲子 粟  
 切崎山山の井代名省おれ 雲  
 畔傳ひさるるは 柳もー 雲  
 雲うらるる雲は月とたのまに 等  
 雲を乃種はいとさひい 須  
 梓弓矢の羽乃露を智るそ 素  
 願事をとるあうさの雲  
 松菌取は味もさうなるの雲  
 酒乃き恨をさか取ー  
 奪今を許すはてさうさ  
 さう送る傾城の雲  
 雲さきと神さうむ地さ  
 月の影はさかよりさ  
 結さう雲釣雲さう雲  
 雲乃端とするあーのう木  
 雲さく初雲さくはさの  
 うせの谷は 秘 鼓 折

良 形 良 形 良 形 良 形 良 形 良 形 良 形 良 形 良 形 良 形



















王道良玉道良玉道良玉道良玉道良玉

去

梨 環 錫 毫 新  
水 妙 膏 丸 膏  
香 丸 蓮 氏 水 蓮 丸 膏 良 丸 蓮 膏











葉、松、豆、松、豆、松、意松意松

石二  
く  
す  
り  
足  
り

路通

君とすう尺の字新の枕を

む一乃儘をうたぬの下

玉東

紙子もむなしくも月すて

向之

わしはふむむ毎のこころ

殘夜

植本屋ハノ本ヲ新ニカスル

邑

命のゆくすゑをハ覚えし

卷之六

肌ぬきくふをきくは月夜

々

兎のうと紀のあう

初

葉子  
破華



細  
文  
之  
一  
秋  
葉

イニ

本

第ニ正々然の意を以て

在

月 凡 生 一 樣 入 琴 來

卷之五

るくの国のミナト

...

地獄徳と

天

ふく  
の  
屍  
同  
様  
に

一

雄乃雄  
子乃子  
乃乃乃

之

夏商周之書



多代業



昔々あるやあり甲申のたふ  
 岸よりいづる青牡丹星  
 雲より毎は片積りゆく  
 此ころ室小舟と常々ある  
 又出くぬのせ候の機座  
 猿う猿うあひひつらぬ  
 たうときハ慾望集のやう  
 葉のつゝ人なはとくに  
 田を買つて信一くまを来門  
 又呪う風義乃入口  
 夕月夜夜を後よほさうて  
 そらへく雲より秋の岸焼  
 谷嶺又新伝を春とあるう  
 そやせ止しれ舞を梯上  
 折鶴く雲くとて送る船保あ  
 春と叩けくイニ其下は老くニ其あ  
 高き店より下りお供  
 こゝろこゝろけうき陰  
 執事

子夕並之通夕按良夕並酉夜之並通夜良夕

芭蕉

高き七日をみる禁う糸  
 帷々煉乃わたり細柄  
 足踏正をまきいあむ衣引  
 糸一糸とほつる軍の戸  
 片月も隣にゆるそふ今  
 校見今一さ相の素を刈  
 黒髪をみくハ蝶イロムの如くあて  
 内印乃下向舞へり刺す  
 すまよ立付もの使ひめし  
 一夜のちきり錦川きり  
 松明に白刃んと叫ぶ人ぞ  
 せき持子のあふ流影  
 新取志ぬ歌を世はなけき  
 こゝれ併をあふ山寺  
 雲を祇樓や橋よりあふえり  
 虹乃げ巻を日代句あやう  
 吉川そハ澄白城壁を月けし  
 三川越く席の一ツ舌を原ふ

秋 並 南 水 無 良 凡 角 道 良 白 凡 其 角 口 疥 筆 白 浅 凡

歌 意 南 亦 世 良 風 南 意 良 白 風 南 齊 良 白 風







朝日新聞

礼部

10/2/1952

2022-2023

不離—Brain 腦

廣二斷記

[illegible]

卷之六  
 六

*[Faint handwritten notes at the bottom of the page]*

平江府志卷之五

11. 10. 1931

1870

樓閣

年其子

乃快也

上組の本所 金部 金部 金部

陽春賦

名曰種福堂

1. 萬里長城

後代

云來

15

七

化

244

2

...

一

1. 50% 100% 100% 100%







むをそ乃伝流よかる秋の凡  
石定なまきと云はれおとる  
右のよれ張ひ常よりきなり  
鳥掛くきり 相役の文  
山宿とりめいくるる鉄の鉄  
ま田く移りて中より凡  
平めりるふとあきりり場  
後仕とさきくするま食流  
月多き夜の塩梅とそきる  
聖具柳ハハほききり  
吾のちと確あふとありけり  
まきくくかきまの侍軍  
集まといきききり  
み川と船自よふよに雲  
蒼くく移りての雲とほれ  
四ふくある侍と云なり  
新道町の子女の勢と能  
いつくもまききり世の中

未 五 化 未 五 化 未 、 化 、 未 、 五 、 化 、 五 五

玄来

紫臣とこけかき凡乃云ふ  
望松より蜂の啼きる雲  
み雲の持ち張の今と叫く  
まきと云はれ乃ききり  
半時ほど夜より月の入  
火けききりと火の雲  
彩りと雲這うる雲流あ  
足方と云はれとあふむ  
切きく富見後とみ彼山  
うらうらと云はれとあ  
雲合と云はれ乃ききり  
みききり乃ききり  
うくくくくくくくく  
こくくくくくくく  
砂川の流く流きり  
家と云はれと云はれ  
百ききり乃ききり  
某種おほり小西と云はれ

未 五 化 未 五 化 未 、 化 、 未 、 五 、 化 、 五 五



集まるといふ事やうやう  
ぬくぬくとお月さまよき雲  
蒼々たる柳の影の笑にほれ  
四ふくふくはる春の空なり  
新道所の子たちの勢古能  
いつ日もまきまきふ世の中

未 五 化 五 未 五 化 五

四

紫原とこけかき風乃忘ふか

玄来

望松より柳の啼ききききき  
あふあふ手帳のふと叫ぶ  
ききききききききききき  
半時ほど夜のうらな月の入  
火けききききききききき  
彩やと昔這うた昔法お  
足舟とととととととととと  
切きき富見後と丹波山  
うらうらとととととととと  
寄合と縁乃と乃ぬ妙法牛  
いふふふふふふふふふふ  
うらうらとととととととと  
砂川乃ゆき流るる月夜  
あふあふあふあふあふあふ  
百きききききききききき  
某種おほくふ西とととと

未 五 化 五 未 五 化 五



柳小影所藏ハモリ一初五阮  
 月川持るる石中乃釋  
 村々め里より園はあうも  
 堀うけ後と手あふ石垣  
 月影も海あふむふの端  
 小綴うねく砂より雪うけ  
 こそとるくそくと強塞ま  
 手桶を入るおふの松  
 塵も食いつまのうくそ  
 大工乃邪うは泥とる  
 升桶乃水汲うる庫裡の先  
 傍とやらうく邵注利とる  
 隙かもしきる面乃あうく  
 趣くや外よあうく悦足  
 歩競を競と競とあう方  
 馬うくありま棋の本代表  
 月花よあうき門を青へつ  
 葉ねるまを兎の毛る腰板

書 並 牛 書 未 抄 書 牛 秀 未 道 書 素 牛 交 考 交 考 交 考















考、考、考、考、考、考、考、考

龍  
一、並山藥良筋山良通山筋藥良以善



元禧二日 雲月神  
伊妹良郎

[illegible]

竹 籜 小 葉 良 其 山 竹 葉 親 在 山 上 小 葉 良



蕙踏芳不風真燕凡砂不美芳風燕不真砂凡

路通

子力东好 丑秀力志 庚子项好 外丑秀美 房



むもふれ轉るる ねのしる  
豆腐上よりあけく客待  
うらうらと文程とゆる細心  
ふれと様——と堂の形見  
唐様もてつとふり半の松  
は乃さ——ある月此廻廊  
まの寄窓を代坊を打眠と  
みれおのうきとつと此虫  
うと矢とよんふけは膝もき  
白髪さ——もと藤のうら  
杜宇奇藤の松とゆる  
おのりうのひる竹の子は寄  
文は川三吏文達と川や  
生隔押やうとゆる  
おとる蘭とゆる  
ま履ふ——む西風呂の偏  
内裏建はふとゆる  
燕乃お入ふとゆる

青 頤 刎 西 苺 子 刎 頤 好 怪 五 力 房 子 頤 仁

梅乃落すうと此霜のそけ  
ささお——とふ乃 乙刎  
雲雀あく山由土粉は乃や  
ととふ 素房  
行隅は虫齒かえとふの月  
二階の窓とゆる 苺  
庭やうらうと代松はえと  
楓の葉とゆる 苺  
あ——と代松とゆる 苺  
心は乃——と呼とハ——と  
卯の刻は葉とゆる 苺  
ささきとゆる 苺  
葉のれすさのふとゆる  
雀うらうと古とゆる 苺  
懐ふとゆる 苺  
けささ——とゆる 苺  
錢の柄とゆる 苺  
屋よりとゆる 苺

青 頤 刎 苺 房 子 頤 好 怪 五 力 房 子 頤 仁



市中ハ我の如きは長月

あつゝと門く入る

二葉抄にも書きたる物語

片方多しとて一牧

はあ六郎も名を以て不自由

はるゝやうは長き旅路

単村は嘘とつる夕戸

蘇乃の茅とつるは地力

そこかのねらうハ命の合

秘也七尾の舟と伝

真の骨とつるは老と

侍人へ小師つる程

立ち上る屏風と倒置

湯屋ハ竹の煮子伝

苗子の実と吹流を

傍やさむく書は久

猿川の猿と書と読

年は一斗の地と

去来 邑道

去来 邑道

去来 邑道

去来 邑道

去来 邑道

去来 邑道

去来 邑道

去来 邑道

去来 邑道



妻は母はあてくま 狸机 正秀  
 店屋もくま 休のまかり、  
 行ぬくひ 猪のきりーの餌の系  
 のうきやうきふ 雛代下 半我  
 大猪はおひく 雛のきりー  
 身はぬき 成のふた 研なき  
 小口の喰ふなる 細工をこ  
 柳のきりーきりー 大さうの衣  
 こまき ねの 休の 休の 浦  
 むの 折金 なる なる なる  
 けきき ぬききき 破あき  
 留油 祿さききききききき  
 雲夢の隣 ちきき 極つひ  
 休くさききききききききき  
 取なき 雨きききききききき  
 りききききききききききき  
 元は又こきききききききき  
 雛の 後と 隣りききききき

羽紅 野水 史邦 龍景 風芳 雛 砂 雛 風 飛 芳 政 芳 半 我 来

元福二年

市中ハ巻のあはひや 長れ月  
 あつーききききききききき  
 二巻 妙なきききききききき  
 居あきききききききききき  
 ぶききききききききききき  
 けききききききききききき  
 単村は 雄こききききききき  
 藤の 芽ききききききききき  
 きききのねさききききききき  
 雛も 七尾のききききききき  
 真の 青ききききききききき  
 侍人 へききききききききき  
 きききききききききききき  
 湯屋ハ 竹のききききききき  
 苗ききのきききききききき  
 傷やきききききききききき  
 猿川の 猿きききききききき  
 年ききききききききききき

来 互 北 来 道 北 来 氣 北 来 道 北 来 氣 北 来 道 北 来 氣 北 来











いちど紀二日の物も喰て金  
雪けはさむる時乃山か  
火よりい昔はさる家れ寺  
ほととに皆唱仕音より  
瘦骨のすこ起出るちう  
隅をわさく車川こむ  
うきくを根殻垣よりちん  
いまや別乃乃ちー  
セーけは掃く歌をきち  
思ひ切る死るいん  
また有明月の初  
湖水の秋乃比良の初  
柴の戸や若妻泣き  
布子とあふ風の夕色  
押合て床くハ又立川を  
あくられ雲乃す赤き  
一擲鞆川よりれ  
枇杷乃古葉は木芽もえ

邦 兆 来 意 兆 邦 意 兆 邦 兆 来 意 兆 邦 意 兆 邦 兆

お

今日平々年乃初れ  
半ハ仕付る麦乃あ  
油裏と買んや極の味  
け乃美多つ秋の風な  
宿の月奥へ入と古たみ  
先ユきなる故屋の柏  
文けの傍案中は情を  
焼焦しある出まを  
縁はむ毎の義あるの  
帰礎との石を赤い  
すかを産め人も  
弘造のけく情乃  
青雪いあふ  
やうり秋の風  
八月ハ  
梵や戸城の  
折る上  
ほくも

新六 酒客 盆水 茂原 手 茂原 六 茂原 六 茂原 六 茂原 六 茂原 六 茂原 六 茂原 六 茂原 六

五七















暖うき草の根乃耳くきく野幸  
 池乃小隅よ芹此水音  
 蟻付り蛤葉屋の物の月史部  
 月くく寒のいも婦の破き戸  
 老僧乃帽子つとまる秋の房煮桃  
 を穀ゆき持ち保を矢のふ  
 六月と給乃二葉よま刈く素牛  
 多きと飲子けや産席ま  
 播あまの播きさける播の徳之道  
 ぶくゆりふとまその月  
 校作の根よ階子をけく車庸  
 二羽垂んく家のあふし  
 きと結か葉の産元ゆき  
 中まふむく木葉乃禪  
 隙入ぬ小公あるまの葉  
 長いとの芽れをゆき赤土  
 里裏のまき葉をまの葉  
 産むゆきの産ゆる太

野幸、史部、煮桃、素牛、之道、車庸、志、乃、美、言、産

五九

又漢車口切

もを

口切小隅の産をまの葉  
 笋見ささ殺乃を月  
 小推乃まは後つ可叶なり  
 秋の野馬乃さふくの飛  
 産入けりま月の明けり  
 ちとあまのち裸所  
 雞乃た子の子を産まふ  
 あくく不機をまきまふ  
 縁さけ六田乃柳極極  
 柳葉葉危く折大豆のけ  
 細うなり雨もまき葉の羽  
 體かふたえ坊乃極  
 けりくま産まふまの葉  
 けりくま食の放まふまの葉  
 けりくまのまの葉を秋ま  
 けりくまのまの葉を秋ま  
 西日入花と菴の間半床  
 草の二まふ入をえてのめ

産、美、言、乃、志、車庸、道、桃、牛、素、之、道、庸、車、志、乃、美、言、産



合 宋 梁 蕭 吳 什 奕 慈 原 合

洗足寺と為付くを記

六 道 六 案 六 事 六 第 六 書 六 義 六 教 六 樂 六 案







けくきん愛とあへひくく  
 うん 晴るひふれ乃れ 可端  
 萱ふされふひうま夢と持とて 困水  
 人乃たふくやうの致なり 芭蕉  
 まぬふ土まのかん垂し垂 桐雲  
 極木のうけふ今く 改 東岳  
 相すきと律ふくく 工山  
 登ふふれといつも 春 林楫  
 篠竹の虎と居ふれ 枕草  
 はくくや大くらあひふ 行  
 獨来と田舎ふれ 瑞 瑞  
 場ふのけ 乃れつ 水  
 意ふと中ねとれ 再  
 かくくく又の 系  
 深明へ甲ハ 度  
 一里まふ 山  
 我むと侍て 内  
 言ふ 瑞



篆 道 六 畫 末 篆 畫 六 篆 道 六 畫 道 篆 畫 六 篆 道

如行

端 揖 內 庭 系 鼎 水 端 行 尊 揖 山 庭 焚 香 水 端



あつたれそとてきつて響く雨  
 徒手逢ふ極乃やうく  
 挟みてハあるかと揺れ行やうい  
 非くとも都々々々うま  
 振ふれむとけね織ついとね  
 又寸と出て一寸つゝ  
 ちの木のまゝに海雲の白  
 やうきい月を降と見え  
 まゝつゝとふれと地と月  
 やうきすき杖のちや  
 ままなるのそつと旁の中  
 も菊の杖とつゝふてなく  
 お十二はさうなれけり  
 ふ津とよけるま様のは  
 萩表とまゝとふけあらは  
 治りゆふ海傍者の小窓  
 六段のちれと古殿は松を  
 耶うやれり日なうく

行 反 美 羽 水 行 山 拊 瑞 水 拊 山 行 拊

おりね 叩端

ちのれ葉といつと白い  
 松の幼なとま度乃杖  
 まん月ねはま月れけえて  
 みらね早き人のとてえ  
 ちのま笑いと後とまよう  
 かけぬふの付ふやう  
 けうとちとちへは住居  
 ちのまうて竹渡り村  
 かつとる鳥とちとて一  
 ちの葉とちとちやう  
 積ちてまきいんをけ  
 もちとちとち新伐や  
 ちのちの桐とち乃ち  
 ねとちの月れとち  
 ちのちのちとちのち  
 まゝのちのちのち  
 ちのちのちのちのち  
 ちのちのちのちのち

水 瑞 友 拊 水 山 友 拊 瑞 水 拊 山 行 拊



梁山 箱 度 梯 梁 山 探 友 水 梁 度 山 箱 瑞 裝 岳 山

知足 相葉 叩端 冀言 自笑 如風 安信 重辰 三益 爲樂 是凡 費言



夢より延冊付く及屋宇  
庭野を背負ふて彼  
を歩く勢は急して雲の  
ふ日乃風の宮雨乃とや  
夢より夢も不慮のこゝに置  
て屋乃中を歩くをちか

大和巻二十二白雲

延 冊 付 く 及 屋 宇

南窓二元春とて歌ふ

玄本

月影とてその光を海の上  
に映しあはせしは秋の暮  
惜は貧乏の唐をふとて  
うとてはまゝ一瓢乃さけ  
友佐の多きとて女はまゝ  
世にハ常なるありちの将  
けりあるはあやかし  
何人の中を歩くとて氏を  
啼きあはせしは山乃大の  
軍乃か城とてさ 長追  
志強よとてさぬ月とて  
赤生とてさぬ帳乃長合

月 影 と て そ の 光 を 海 の 上  
に 映 し あ は せ し は 秋 の 暮  
惜 は 貧 乏 の 唐 を ふ と て  
う と て は ま ま 一 瓢 乃 さ け  
友 佐 の 多 き と て 女 は ま ま  
世 に ハ 常 な る あ り ち の 将  
け り あ る は あ や か し  
何 人 の 中 を 歩 く と て 氏 を  
啼 き あ は せ し は 山 乃 大 の  
軍 乃 か 城 と て さ 長 追  
志 強 よ と て さ ぬ 月 と て  
赤 生 と て さ ぬ 帳 乃 長 合







書角道雲南書道雲角道雲角道雲角道雲

爲

邦 春 石 翁 枕 家 鼎 本 翁 石 哉 史 邦 乙 列 素 概 玄 東 戶 鼎 赤 石



水鳥よ油の誰をおそふ

白紙より一芦薺

芭蕉

中級の餅も及ばず持たせて

証堂

月代徑は当分あつて

峯

鳩の棲の實はほろゆくと

荻

板の隙より田舎さめぬ

堂

簾戸は袖あつて月代橋を

里東

君々みまゝに梅子の時

美

泣かす土着ぬき男は

峯

御倉はく種金とふり

東

門くまの月の餅とく

堂

延踏をとりては乃

美

山陰をとりては乃

美

梨子地あつて児のさ

堂

名月よき井の櫓は

東

今より此を寄る

堂

あつてあつて佛は

東

あつてあつて人宿

東



邦 杞 外 來 石 爲 兆 邦 夾 石 杞 邦 來 武 爲 杞 來 兆

七  
峯

東堂 東堂 東堂 東堂 東堂 東堂 東堂 東堂 東堂 東堂







